

〔研究ノート〕

高句麗の建国説話

西 田 禎 元

要 旨

本稿は、古代朝鮮における三国の一つである＜高句麗＞の建国について、主に説話の面から考察した＜研究ノート＞である。

高句麗の建国説話については、『三国史記』『高句麗本紀』に記されているが、建国者の名前や説話の内容に、他の伝承との相異も見られる。

上記の説話は、いわゆる＜朱蒙＞始祖説話であるが、これは、「広開土王碑文」や中国の『魏書』などの古文献に記されている伝承の流れをとおして、まとめ編集されたものであろう。

そうしたことがらと、日本の建国説話との比較について、少しく検討を試みた覚え書きを示すことにしたい。

キーワード：高句麗，建国，『三国史記』，朱蒙，中国古文献，古事記

1. 『三国史記』『高句麗本紀』における始祖説話

高句麗は百済や新羅と並ぶ古代朝鮮における三国の一つで、紀元前 37 年に建国され、668 年に中国唐と新羅の連合軍によって滅ぼされた。28 代にわたる王の統治による 705 年の歴史である。

建国時の状況については、歴史上の故事を話にした、＜史譚＞とか＜史話＞といった説話の様式で、半ば伝説として記されている。

それらの幾つかを確認すると、以下のとおりである。

(A) ①始祖東明聖王。姓高氏。諱朱蒙（一云鄒牟・一云象解）。＜中略＞②我是河伯之女。名柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言天帝子解慕漱。誘我於熊心山下，鴨渚辺室中私之。＜中略＞③為日所炤。引身避之。日影又逐而炤

之。因而有孕。生一卵。大如五升許。＜中略＞④其母以物裹之。置於暖處。有一男兒。破殼而出。＜中略＞⑤自作弓矢射之。百發百中。扶余俗語。善射為朱蒙。故以名云。〔『三国史記』卷第13「高句麗本紀」第1,『完訳三国史記』294～295頁〕

①始祖の東明聖王の姓は高氏、諱は朱蒙＜鄒牟、あるいは象解（衆牟？）ともいう＞である。＜中略＞②わたしは河伯の娘で、名前は柳花といいます。弟たちといっしょに外へ出て遊んでいると、一人の男がやって来て、自分は天帝の子、解慕漱だいいながら、わたしを熊心山の下、鴨渚のほとりにある家の中に誘い込みました。（彼は）私欲を充たしてから立ち去り、ふたたび帰って来ませんでした。＜中略＞③日の光が彼女を照らした。体を避けると、日の光はまたついてきて照らすのであった。それから孕み、（やがて）五升くらいの大きさの卵を一つ生んだ。＜中略＞④母は物で卵を包み暖かい所に置いたところ、一人の男の子が殻を破って出て来た。＜中略＞⑤自分の手で弓矢を作って射ると、百發百中であつた。扶余の俗語に、矢を善く射る者を「朱蒙」といっているの、そのように名づけたという。（金思燁氏の訳による。）

「高句麗本紀」の冒頭は、高句麗建国の始祖＜朱蒙＞の誕生と、その経緯などを伝えている。

①には彼の姓名、②には彼の前史ともいうべき、母親になる＜柳花＞と＜解慕漱＞という男性が結ばれたこと、③もまた彼の前史で、柳花が日光に照らされ懐妊し大きな卵を生んだこと、④には彼の誕生のこと、⑤には成長した彼が弓の達人になったことなどが、それぞれ記されているのであるが、③・④からは朱蒙が卵から生まれたという＜化生説話＞の構想がうかがわれる。＜かぐや姫＞や＜桃太郎＞の類である。

思えば、我が国の＜須佐之男命＞も父親の＜伊耶那岐神＞が黄泉の国から逃げ帰り、＜小門の港＞で禊をし、鼻を洗ったときに生まれ、神武天皇の父親も、＜豊玉毘売命＞という大鰐（海神の娘）から生まれている。

このように神話や昔話の世界までさかのぼると、両親が人間であるとは限らない。

それでも、上記②の記述からは、解慕漱なる人物が朱蒙の父親であるという異説の物語も夢見られよう。韓国の人気テレビドラマ『朱蒙』の演出がそうであった。

⑤は言わずと知れた英雄譚の構想である。

2. 「広開土王碑文」における始祖説話

それでは、前段①に記されていた名前の異伝について確認してみよう。

「鄒牟」は<広開土王碑>（414年建立）に記されている記述で、上記『三国史記』（1145年編纂）よりは731年前ということになる。

(B) 惟昔始祖鄒牟王之創基也出自北扶余天帝之子母河伯女郎剖卵降出生子有聖<中略>於沸流谷忽本西城山上而建都焉〔碑文冒頭、『広開土王陵碑』114頁の記載本文による〕

〔昔、始祖鄒牟王が高句麗国家を創建する時、その源は北扶余から出た。鄒牟王は天帝の子であり、母は河伯（水の神）の娘であった。卵を割って出てきたが生まれながらにして聖徳があった。<中略>王は沸流谷忽本の西側山城に城を築き、都を創建した。〕（全浩天氏の訳による。）

出生から建国にいたる説話の大筋に違いはないが、「朱蒙」という名前ではないので、弓の達人という故事は記されていない。

3. 「朱蒙」という最古の記述

ところで、前述の『三国史記』に記されていた「朱蒙」という名前であるが、最古の記述は、『魏書』『高句麗伝』（6C編纂）に見られる。

(C) 高句麗者、出於扶余、自言先祖朱蒙。朱蒙母河伯女、為扶余王閉於室中、為日所照、引身避之、日影又逐。既而有孕、生一卵、大如五升。<中略>其母以物裹之、置於暖处、有一男破殼而出。及其長也、字之曰朱蒙、其俗言「朱蒙」者、善射也。〔『魏書』卷100「列伝第88、高句麗伝」、2213頁〕

ここには、高句麗の源が扶余であり、始祖が<朱蒙>であること、朱蒙の母親が卵を生み温め、その卵の中から男子が出生し、<朱蒙>と名づけられとこと、<朱蒙>という名は弓の達人を意味することなどが記されている。

『三国史記』（12C）と『魏書』（6C）の記事を並べてみると、朱蒙誕生の記事は、明らかに前者が後者を踏まえたものであることがわかる。

また、『三国史記』に記されていた「象解」という名の<解>は、朱蒙の父親

に擬せられる「解慕漱」の＜解＞に由来するのであろう。

なお、日本の歴史書である『続日本紀』に、朱蒙を示唆する「都慕」という記述が見られる。

(D) 今上即位。尊為皇太夫人。九年追上尊号。曰皇太后。其百濟遠祖都慕王者。河伯之女感日精而所生。皇太后即其後也。〔『続日本紀』卷 40, 「桓武天皇」延暦 9 年 1 月 15 日; 『新訂増補国史大系』第 2 卷, 542 頁〕

〔今上天皇＜桓武天皇、筆者注＞が即位すると、皇太夫人と尊称された。延暦 9 年には遡って皇太后の尊号を追称された。百濟の遠祖の都慕王（百濟王の始祖で、扶余を開国したと伝える伝説上の人物）は、河伯の娘が太陽の精に感應して生まれた。皇太后はその末裔である。〕（宇治谷孟氏の訳による。）

この記述によると、桓武天皇の母である「高野新笠」の遠祖が「都慕 (TSUMO)」(朱蒙のこと) にあたるというのである。百濟王の血筋を引く高野新笠は、朱蒙の第 3 子である「温祚」が百濟初代王であることを思えば、肯けな

いこともない。

(E) 夫百濟太祖都慕大王者。日神降靈奄扶余而開国。天帝授籙。惣諸韓而称王。(同前, 延暦 9 年 7 月 17 日, 546 頁)

〔そもそも、百濟の始祖の都慕大王は、太陽神が靈を下して扶余地方を支配させ国を開かせたもので、天帝から支配者となるとの予言書を授けられ、韓の諸地域を支配して王と称しました。〕（宇治谷孟氏の訳による。）

ここには、都慕（朱蒙）大王の扶余建国と韓地域支配のことが記されている。

(D) にも (E) にも、朱蒙関連の説話が導き出され、(D) には誕生説話、(E) には建国説話が、それぞれ記されているといつてよい。

4. 高句麗建国の都城

さて、朱蒙の高句麗建国説話は、上記 (A) の記述に続いて以下のように語られる。

(F) ⑥朱蒙乃與烏伊、摩離、陝父等三人為友。行至淹淖＜？＞水（一名蓋斯水。在今鴨綠東北）欲渡無梁。恐為追兵所迫。告水曰。我是天帝子。河伯外孫。

今日逃走。追者垂及如何。於是魚鼈浮出成橋。朱蒙得渡。魚鼈乃解。追騎不得渡。⑦朱蒙行至毛屯谷（魏書云至普述水）遇三人。＜中略＞遂揆其能。各任以事。與之俱至卒本川（魏書云至紇升骨城）。觀其土壤肥美，山河險固。遂欲都焉。而未遑作宮室。但結廬於沸流水上居之。国号高句麗。＜中略＞時朱蒙二十二歲。是漢孝元帝建昭二年，新羅始祖赫居世二十一年甲申歲也。〔『三国史記』『高句麗本紀』，295頁〕

⑥そこで朱蒙は鳥＜烏＞伊・摩離・陝父ら三人と友になり、（逃げて）淹淪水＜一名、蓋斯水で、今の鴨緑の東北にある＞に至り、川を渡ろうとしたが、橋がなかった。追手の兵が迫ってくるのを恐れ、川に向かって「われは天帝の子であり、河伯の外孫である。今、逃げてゆく途中であるが、追手が迫っている。どうしたらいいだろうか」といった。その時。（水中から）魚鼈たちが浮きあがって橋を架けてくれた。朱蒙が無事に渡りおわると魚鼈はすぐに散ってしまい、後を追ってきた騎兵は渡れなかった。⑦朱蒙は毛屯谷＜『魏書』には、「音（普）述水に至った、」とある＞に至って三人の男に出会った。＜中略＞三人の才能を勘案して、それぞれ仕事を任せ、いっしょに卒本川に至った＜『魏書』には「紇升（升紇？）骨城に至った」とある＞。その土壤は肥美なうえに山河が險固であるのを見て、その地に都邑を定めようとした。しかし宮室を作る暇がなかったので、ただ沸流水のほとり（今の桓仁）に家を建てて住み、国号を高句麗と呼び、＜中略＞この時、朱蒙の年は二十二歳でこれは漢の孝元帝、建昭二年、新羅では始祖、赫居世二十一年の甲申（B.C. 37年）に当る。（金思燁氏の訳による。）

高句麗建国の経緯が、⑥には、朱蒙主従が魚や鼈が架けてくれた橋を渡って、敵の追手から逃れたこと、⑦には、＜卒本＞（現在の遼寧省桓仁県）に至り、沸流水（現在の渾江）河畔に都城を築き、＜高句麗国＞を建てたことなどが記されている。紀元前 37 年という。

都城に相当する山城の址が、この地の＜五女山城址＞として確認できる。

西門の登り口には「高句麗始祖碑」と刻まれた 5 メートルほどの石柱があり、999 段の石段を登ると山城の＜西門＞がある。そこから更に東南の方向に＜王宮遺址＞・＜天池（貯水池の址）＞・＜居住建築址＞・＜点将台＞などが見られ、＜内城東門＞に至る。点将台は断崖絶壁の上に据えられ、眼下に渾江の流れが見下ろせる。

卒本の都は第10代<山上王>の209年、<国内城>（現在の吉林省集安市）に遷された。<鴨緑江>の西北部にあたる北朝鮮との国境の地である。新都の居城は平城の<通溝城>（国内城）と山城の<尉那巖城>（丸都城）であった。

『三国史記』には次のような記述がみられる。

(G) 二年（山上王の2年、198年）春二月。築丸都城。<中略>十三年（山上王の13年、209年）<中略>冬十月。王移都於丸都。〔巻第16,「高句麗本紀」第4〕

高句麗の城は、平時には平城（邑城・在城）が、戦時には山城が主になるという、平城・山城がセットになっている様式であった。前述の<五女山城>は山城で、平城に相当するのが<下古城子土城>であると思われる。

5. 中国古文献に見られる朱蒙建国説話

ところで、朱蒙の建国説話に似た話が、中国の古文献に散見される。

(H) 北夷橐（橐）離国王侍婢有娠，王欲殺之。婢対曰，有氣大如雞子，從天而下，〔吞之〕，我故有娠。後産子，<中略>王疑以為天子，令其母収取，奴畜之，名東明，<中略>東明善射，王恐奪其国也，欲殺之。<中略>以弓撃水，魚鼈浮為橋，東明得渡，魚鼈解散，追兵不得渡，因都王扶余。

（『論衡』「吉驗第9」，新釈漢文大系68，『論衡』上 148頁）

〔北方えびすの地の橐離（高麗）国の国王の侍女が妊娠をしたので，王はこれを殺してしまおうとした。侍女が王に向かっていうには，「鶏卵ぐらいの大きさの雲気が天からくだってき〔それを呑んだので〕，わたしは身ごもりました」と申しあげた。あとで子供が生まれたので，<中略>王はひょっとすると天子になるのではないかと疑い，その母に引きとらせて，しもべに養育させ，東明と名前をつけて，<中略>東明は弓の名人なので，王は自国がうばわれるのを心配し，これを殺そうと思った。<中略>弓で水面をたたくと，魚やすっぽんが浮かび上がって橋の代わりをし，東明が渡りきると，魚やすっぽんはばらばらに散って，追手の兵は渡れず，そこで扶余に都をつくり王となった。〕（山田勝美氏の訳による。）

この話は後漢時代の王充（27～101年？）の記述（編集）なので、既に1世紀のうちに知られていた建国説話ということになる。『三国史記』の説説との違いは、＜東明＞なる人物が＜高句麗国＞の始祖ではなく、＜扶余国＞の始祖であるという点である。

『後漢書』『東夷列伝第75』（南朝宋代、范曄＜398～445年＞の撰）の＜東明伝説＞や『魏書』も同様である。

こうしてみると、『論衡』『後漢書』などに記されていた＜東明による扶余建国説話＞や、『魏書』の＜朱蒙伝説＞が「広開土王碑文」の＜鄒牟伝説＞を経て、『三国史記』の＜朱蒙による高句麗建国説話＞に結実したといえるだろう。

6. 日本の建国説話

ここで少しく、『古事記』に記されている日本の建国説話を見てみよう。

一般的には「邇邇芸命（ニニギノミコト）」の＜天孫降臨説話＞と、神武天皇の＜東征（大和建国説話）＞の二段構成になっている。

前者の神と後者の天皇は、神話の中では曾祖父と曾孫の関係である。＜天降り＞・＜建国＞という二つの構想と、主人公たちの血縁関係は、上記＜高句麗説話＞と同様である。

朱蒙の父親の位置にあたる「解慕漱」は、＜天帝の子＞で天降りしたという伝説（天子降臨）であり、「邇邇芸命」は「天照大御神」の孫にあたる（天孫降臨）である。

神武天皇の大和建国（前660年）と朱蒙の高句麗建国（前37年）という、二つの説話における類似の様相も幾つか垣間見られる。

（1）出生 神武の両親 ＜父＞ウカヤフキアエズノミコト（鰐の子）
 ＜母＞タマヨリビメノミコト（海神の娘）

朱蒙の両親 ＜父＞解慕漱（天帝の子）
 ＜母＞柳花（日光に照らされて卵を生み、その卵を物に包んで温め、卵から朱蒙誕生）

（2）母親の属性 ＜水＞に関係が深い。
 神武母（海之女・海神の娘）
 朱蒙母（河之女・河伯の娘）

皇后の属性

神武の皇后である「イスケヨリヒメ」も＜水＞に関係が深い。皇后は父親の「オオモノヌシノカミ」と母親の「セヤダタラヒメ」との間に生まれたのであるが、誕生の経緯は、＜矢＞に変身した父が下流にいた母のもとに流れ着き結ばれたという。＜化生＞譚の変形である。

- (3) 6人の服従者 神武 ウサツヒコ・ウサツヒメ・サラネツヒコ・ニヘモツノコ・キヒカ・イハオシワクノコ

朱蒙 烏伊・摩離・陝父・再思・武骨・默居

- (4) 援助 神武 (サラネツヒコ・タカクラジ・ヤアタカラス・オトウカシ・ニギハヤヒノミコト)

朱蒙 (魚・鼈)

- (5) 八咫烏と三足烏 [日本の場合]

＜八咫烏＞は前述のように、神武天皇東征の際に道案内をした鳥であるが、その足は三本であると伝えられている。熊野大社や弓弦羽神社には、三足烏を象った旗などが掲げられている。

また、『文安御即位調度図』に描かれている＜銅烏幢＞の頂部には、＜八咫烏＞と思われる三足烏の像が確認できる。説明の文章と注書きを示すと、以下のとおりである。

其上立烏。開翼延頭。幢下有玉七琉。烏有足三。
(『新校群書類従』巻第92, 669頁)

[高句麗の場合]

<三足鳥>は<火鳥>ともいわれ、古くは4世紀の<古墳壁画>に見られ、天孫の象徴として崇められ、高句麗の紋章になっている。テレビドラマにおける朱蒙軍の旗印にもなっていた。

なお、中国説話における三足鳥は<金鳥>ともいわれ、太陽に住むという伝承が『淮南子』（紀元前2世紀）巻7「精神訓」に記されている。

日中有踰鳥，而月中有蟾蜍。

（新釈漢文大系『淮南子』上，323頁）

{太陽には三本足の鳥がおり，月にはひき蛙がいる。}（楠山春樹氏の訳による。）

ともあれ、<三足鳥>の伝説に関しては、中国 → 朝鮮 → 日本の図式で伝えられたものであろう。4世紀の高句麗壁画と8世紀に編まれた『古事記』の説話を並べれば、前者の古代性は明らかである。

7. おわりに

以上、高句麗の建国説話について少しく検討を試みたが、現在の中国大陸に所在するという歴史の現実や、古代における中国や朝鮮半島の日本への影響を思い合わせるとき、中国・朝鮮・日本にわたる類似の建国説話の存在は確かであり、延いては世界の各地に共通する説話の構造も充分に考えられるのである。

（にしだ・ただゆき，本学教授）